

豊橋市美術博物館友の会だより-2007年-夏号

Vol.65
FU風伯HAKU
Summer 2007



野田弘志展～写実の彼方に～

ただいま好評開催中～9月2日[日]まで 美術博物館 全館

野田弘志の作品といえば、黒い背景に緻密に描かれた物体をイメージされる方も多いのではないのでしょうか。これは豊橋市美術博物館所蔵の野田コレクションが「黒の時代」と呼ばれる1970年代のシリーズを中心としているためですが、今回の展覧会を機に、新たな野田弘志絵画の魅力をご観いただきたいと思います。

本展では19年前に開催された「野田弘志展～明晰なる神秘」以降の「TOKIJIKU(非時)」「THE」シリーズも大きくクローズアップされているほか、雄大な風景や華やかな花などのテーマ展示を行い、野田の新たな側面をご観いただけます。また、参考資料として野田の装丁本や挿絵が連載された新聞・雑誌、教科書など、貴重な資料も必見です(豊橋会場のみ)。資料以外にも豊橋市美術博物館所蔵作品26点が特別出品されるなど、野田



「ルイ・ジャドー」 1982年 松本早苗氏蔵

弘志のリアリズムの世界を十二分にご堪能いただける内容となっております。

おすすめの作品はこの《ルイ・ジャドー》。24.3×33.4cmの小さな作品ですが、お見逃しなきよう。小さいながらも野田弘志のエッセンスが凝縮された1点です。

●イベント案内

作家フリー・トーク

9月1日[土]、2日[日]各日とも 10:30～、13:00～

ボランティア・ガイド

8月の土曜日をのぞく毎日 13:00～、14:00～



「チュウリップ」(部分)1999年
ホキコレクション蔵



「摩周湖・夏天」2004年
ホキコレクション蔵

友の会土曜サロン

「写実とはなにか～リアリズムの画家たち～」

野田弘志さんの「写実とはなにか」と題する講義が、8月4日(土)午後1時半から美術博物館の講義室で行われた。野田さんは豊橋と縁が深く、父君の転勤でご自身が豊城中学在籍の頃、妹さんは松葉小学校に通っていたという話。また時習館高校の美術部だった時、過熱部員で、宿泊の施設があるわけでもないのに部室に泊り込んでデッサンに集中されたことなど、興味深いお話をいくつもされた。野田さんは絵画において、まことにあっけらかんとするほど、まっとうな正統の道を歩んでおられる画家だと思いがする。「人間が、立って、そこにいることが美しい」と、言葉にすればそれだけのことを絵で夜々として実現される。大衆に迎合するのと正反対の「花よりも骨を描きたい」「絶対に売れないような絵を描きたい」

ということを言われる。この方ならではの境地と思われる。写真から描くことの何がいけないか、「写真は、極端に言えば単眼のレンズで見た「記号」だから」だ。両眼で見た時の奥行きはとらえられない、とことん描くと、そこに写真では表現し得ないプラスαが現われるはずである。…みんな、しいんとして聴き入っていた。

少し世俗的な話。鉛筆水彩「五つの林檎」の「あの林檎は一個いくらだと思いませんか？」と大野学芸員。その答えも示されたんだけど、それはまあ、ほおお、そうか、とそこにいた人たちが聞いたということで。講義室に集まったのは50人ほど。沢山のスライドも投影され、これだけの人数で聴いたんじゃ、もったいないくらい充実した一時間半でした。

水谷好克(747)

池田遙邨展—昭和東海道と山頭火—

10月6日〔土〕～11月18日〔日〕 二川宿本陣資料館

大正から昭和にかけて日本画家として活躍した池田遙邨は、歌川広重に私淑し、昭和3年には自らの脚で東海道を歩き、「昭和東海道五十三次」のシリーズを完成させています。

この展覧会では遙邨描く昭和初期の東海道と歌川広重の東海道シリーズの浮世絵を展示すると共に、同時期に遙邨の描いた「昭和六十余州名所」や「昭和東海道五十三次」シリーズの写生帖、さらには遙邨晩年の山頭火シリーズを展示し、池田遙邨の日本画の世界を紹介いたします。



「昭和東海道五十三次 箱根 芦ノ湖」倉敷市立美術館蔵



「昭和東海道五十三次 豊橋 豊橋」倉敷市立美術館蔵

■ 記念講演会

日時:10月13日〔土〕

午後1時30分～

講師:倉敷市立美術館学芸員
佐々木千恵氏

演題:池田遙邨の東海道
五十三次

定員:50名(9/19より電話
で申込み、先着順。
TEL.41-8580)



「行きくれてなんとこころの
水のうまさは」山頭火
倉敷市立美術館蔵

- 会員証にてご入館いただけます。
正会員・高校生会員一年間1回
特別会員一年間2名
賛助会員一年間5名
- 開館時間—9:30—17:00
(入館は16:30まで)

ゲゲゲの鬼太郎と妖怪たちが東海道を旅したら…

水木しげるの 妖怪道五十三次展

9月2日〔日〕まで開催中 二川宿本陣資料館

「ゲゲゲの鬼太郎」など、妖怪漫画の第一人者である水木しげる氏は、歌川広重の「東海道五十三次」を妖怪が旅したら…との思いから制作を始めた「妖怪道五十三次」と題した新作を近年発表しました。広重とは違った、妖怪の見た東海道とはどのようなものだったのでしょうか。

今回の企画展は、この「妖怪道五十三次」と広重の「東海道五十三次」との比較を中心に、妖怪ブロンズ像、館蔵の妖怪が描かれた資料、地元の妖怪についても紹介しています。

ぜひこの機会に妖怪たちと東海道の旅をお楽しみください。

- ギャラリートーク ～展示説明と本陣に潜む？妖怪～
8月26日〔日〕午後2時～ 案内:当館学芸員



京 精姿妖怪道中 ©水木プロ

千總コレクション

「京の優雅 ～小袖と屏風～」展

10月30日〔火〕～12月2日〔日〕 美術博物館 全館

京友禅の老舗「千總」が所蔵するコレクションを紹介し、江戸時代の華麗な小袖、明治時代にデザインに革新をもたらした型友禅染裂、さらにはその美意識を支える円山応挙・岸竹堂などの美術資料によって、京都を舞台に花開いた雅の世界をご堪能ください。



浅葱平絹地番莖立木に文字模様小袖



重要文化財 円山応挙「写生図巻(甲巻)」(部分) 明和8年～安永元年

豊橋市美術博物館整備に関する今までの経緯と ご協力をお願い

豊橋市美術博物館副館長 後藤清司

豊橋市美術博物館は、昭和54年(1979)6月1日に開館しました。以来、学芸員による資料の収集・保管・調査・研究活動を基盤に、郷土ゆかりの美術や歴史資料、国内外の名品を紹介する展示活動や講座・講演会等の教育普及活動を精力的に展開し、地域の文化振興に大きく貢献させていただいております。また、市民の作品発表の場としても活用され、各種美術展、グループ展等が毎年盛んに開催されています。

しかし、現在の美術博物館は施設的に見ると、美術館、歴史博物館、市民ギャラリー、文化財保護等の機能を備えた複合施設となっています。今日では、市民のギャラリーとしての利用や要望が多くなっていますが、一方で市民要望の高い企画展も開催しており、それらを満たす十分なスペースが無い状況となっていますし、美術・歴史資料の収集に伴い収蔵庫も手狭となっているため、必要な整備を行なうというのが13年度に策定された「豊橋市美術博物館等整備事業基本計画」であります。

具体的には、豊橋公園内に美術館・歴史館・収蔵庫の機能を持つ新館を増築し、現美術博物館は市民ギャラリー・文化財センターとして改装するというものです。

この基本計画策定にあたっては、美術博物館協議会、美術博物館友の会、郷土史研究グループ、市議会・福祉教育委員会の意見をお聞きしております。

また平成14年度において、この基本計画を市民に周知させていただくとともに施設計画位置についての意見募集を行いました。この意見集約の結果と豊橋公園整備の考え方との整合を図る中で、旧体育館跡の芝生広場から駐車場が適地ということで市議会にも報告させていただきました。

以上を念頭におき、平成16年・17年度において、新たな公募型コンペの実施に向けて、公募方法や審査員選定、市民参加の手法などの検討を進めるため「豊橋市美術博物館設計者選定手法等検討委員会」を設置。大学教授や美術博物館協議会委員、友の会から原文成会

長、一般公募者など9人の委員で色々と議論していただきましたし、講演会も開催しました。

そうした中、豊橋市の将来を見通した財政状況が過去に無いほど厳しい現状となってきました。市全体の財政計画の見直しを進める中で、美術博物館整備計画も例外でなく延期をしなければならなくなりました。

このことにつきましては、以前「風伯」紙面上で掲載させていただいたとおりであります。

繰り返しになりますが、多くの皆様のご期待をいただきながら美術博物館整備が遅れることは残念であります。このことで美術博物館のあり方を今一度考える大きなチャンスと位置づけ、来るべき時期に向けて、さらに魅力的な企画展・講座・シンポジウムなどを積極的に行い、美術博物館に集まる人の輪を更に大きくしていきたいと考えています。

ただ、現在の収蔵庫については、収蔵スペースを確保し、美術・歴史資料を安全に保存していくため、今年度予算で可動式収蔵棚等を設置するなど収蔵スペースを増やすための改修工事を実施します。

新館建設を含めた美術博物館整備事業につきましては、改めて、豊橋市の次期基本構想「2011～2020豊橋市基本構想・基本計画」に位置づけるべく今まで以上に、全市的に美術博物館整備事業の必要性をアピールするなどの努力をしていきますので友の会の皆様の一層のご協力をお願い申し上げます。



豊橋市美術博物館等整備事業基本計画

西のモネと東のモネ

西澤潤一

ふるさとを出た者が外つ国で褒められるようになり、故郷に錦を飾るといふ話は、子供の頃聞かされて、励みにしてきた思い出がいくつかある。本誌編集委員の神野さんから、私に依頼があったのは、私が話させていただいたNHKの新日曜美術館でのクロード・モネの番組に御興味を惹かれてのことであつたらしい。

偶々日本から、その美しさに惚れ込んだモネは睡蓮の根茎を買い込んでジヴェルニーの庭に作った池に植え込んで、四季さまざまな美しい姿を描き、睡蓮といえばモネの代名詞であるかのように思われるようになったのだが、そのジヴェルニーにある睡蓮の根茎を譲り受けて、この豊橋に植えられ、市民の憩いのよすがとしておられたらしく、この関連のことを誌させていただく。

大体、睡蓮というのはインドが原産だそうで仏様と色々御縁があり、おそらく仏教と共に中国・韓国を経て日本に伝来し、その間いろいろと品種が盛衰して、日本の大変しっとりした品種も出来上がったらしい。これがモネの優しい心を持ったのだろう。

特にモネは光の画家といわれ、水に光が当たったとき、光に輝くとき、光を包んだときの描写も優れたものが多いと思うが、睡蓮がほのかな光で暗闇に浮かぶ美しさなどもモネ独自のものだと思われ、池面で明るい陽光に輝く美しさに優るとも劣らない。

枚数においては、おそらく睡蓮の絵が一番多いと思われ、晩年最後まで描きつづけたのも薔薇のアーチと共に睡蓮だった。そして、この頃、はっきり描画に表われてきたのは、見えるままに、美しさを感じずのままに描いていったということではないだろうか。どの部分をとって見ても、決して薔薇の特徴など捉えてはいない。這い廻った絵具の氾濫である。しかし、それが一寸離れて全体を見たときに素晴らしい薔薇に見え、睡蓮に見える。そして葉一本一本に纏わりつく光の妖精の踊りを鮮やかに表現していることに気がつく。

何といっても、モネの画には暖かさがある。モネの若いときの水の画には、ほんの一筆で表現された素晴らしい美しさがあるが、しかし晩年のそれに表現されている光のかがよいとゆらめきとは感じられないように思える。

私が仙台の自宅を接収されてほんの身の廻りの品物だけしか持ち出すことができずに生活していた頃、

何度も繰返し読むこととなったのが、横光利一氏の「旅愁」だった。戦後に出版された第四巻の分は日本文化にまつわる文化論になっていて、それまでの西洋論と対峙するかたちで東西文明比較論になっているのだが、

パリのストライキの或る日、食べるものも買えずに、矢代と千鶴子の若き二人の恋人は、コンコルドの広場を臨むオランジュリーの美術館に転がり込む。そして気がつかずに帰る人もある一階というよりは地下室の感じさえする楕円形の二つの部屋がつながった有名なパノラマ映画の発想につながったという横光の睡蓮の画に囲まれて中央の椅子にヘナヘナと腰を下ろす。池の中の小島に居る蛙になった気持ちを味わう。何の楽しみもないパリの或る休日、ふとこの話を思い出して歩き、幸運にも、この美術館を見付け出すことに成功し、数時間、立ちつ座りつ「蛙の味」を味わうことができたのはパリ滞在中の最も大きな体験だった。当時はチュイリー公園の入口の両脇にジュ・ドゥ・バウムと対峙して立っていたが、クレマンソーの発注を受けたモネは、自宅の庭に特大の画室を建てて、立体画とでもいうべき画を描き上げ、ルーブルの別館であるオランジュリーに寄贈して費用は全く受け取らなかったという。

日本の睡蓮に惚れただけでなく、多くの印象派画家たちがいろいろな観方を作品に採り入れている。たとえば「かささぎ」も余白を存分に残すという日本画の手法を中心として作品を構成しているように私には思える。是非豊橋の方々が、池の畔に佇んでモネ以上の自然の美しさを見付けて下さることを期待する。



西澤潤一（にしざわ・じゅんいち）氏プロフィール

大正15年、仙台市に生まれ、昭和23年東北大学工学部電気工学科卒業。35年工学博士。37年東北大学教授。58～61年、平成元～2年同大学電気通信研究所所長。2～8年同大学総長。10～17年3月岩手県立大学長。17年4月首都大学東京初代学長に就任、現在に至る。日本学士院会員。文化勲章、勲一等瑞宝章等受章。米国のIEEE（電気電子学会）は、14年光通信・電力給電方式などの業績を記念してJun-ichi NISHIZAWAメダルを制定、毎年優れた研究者に贈呈している。なお、父 恭助は竹本家（蒲郡市）次男、旧制豊橋中学卒業（現時豊橋高校）。田中平六、福谷温、小嶋和四郎の兄にあたる。

友から友へ
Members to Members

友の会イベントに参加して

一枚の絵から

森田眞佐子 (654)



6号くらいの小さなパステル画だった。木漏れ日のなかに女の人がベンチに座っている静かな優しい絵だった。絵を見て初めて心が動いた。絵は何も解らなかつたが、あの時の感動が忘れられず、日本画を習い描くことに夢中になる自分に驚いている。私を別世界につれていってくれた一枚のパステル画・・・時々

思い出す。

豊橋市美術博物館も何回か訪れ、友の会に入会した。一年前のことである。春秋に研修旅行があるときいたので。今年の春の東京研修旅行では、モネ展を鑑賞するとき、

初日に申込みその日を楽しみにしていた。車中では去年秋の研修旅行のとき知りあった方とまた一緒になり、とても楽しく多くのことを勉強させていただいた。

モネの絵は好きで画集を買ってはいるが、実物を目の前に感動を新たにした。水面の光など近くで見ると筆をおいてあるだけなのに、少し離れると水面がきらきらと輝いて見えるから不思議だ。睡蓮やセズ川など水の風景は特に好きだ。水辺にいるような気持ちになる。ゆっくりと観ていたかったが、混んでいてそれができなかったのが残念だった。いつか心ゆくまで観たいと思う。

この旅行では、大好きなモネの作品を鑑賞でき感動したのはもちろんだが、同時に良き友に恵まれたことも印象に残った。絵は感動と良き友を私にプレゼントしてくれた。

「ヨーロッパ絵画名作展」ミニ・コンサートによせて 鳥山忠征 (1502)



今から10年ほど前に仕事で福島に行った時、丸一日休日が取れたので、行きたいと思っていた山寺(立石寺)に東北本線、仙山線を乗り継いで出掛けました。私はこの時まで山寺駅近くに後藤美術館がある事を知りませんでした。駅でその事を知り、山寺を回ったあと後藤美術館に足を運びました。外観は和風の落ち着いた造りで、中に入るとヨーロッパ絵画を中心に展示してあり、ゆっくりと見て回った事を思い出します。今回当美術館で山寺・後藤美術館所蔵「ヨーロッパ絵画名作展」が開催され、懐かし

い思いとともに鑑賞し、とても良かったので一週間後再び来館しました。中でもカラーの絵が好きで、少しくすんだ緑がなんともいえず爽やかで、けがれの無い空気を感じさせてくれます。会期中、友の会特別企画のミニ・コンサートが美術博物館のエントランス・ホールにて行われました。私はこれまで2回ミニ・コンサートに参加させていただき、今回で3回目です。名画を大型画面で鑑賞し、ヴァイオリン・大竹広治さん、電子ピアノ・杉浦雅子さんのお二人の生演奏を聴くという趣向でした。好きな絵画と素敵な演奏で時間のたつのも忘れるほどで、中でもタルティーニの「悪魔のトリルより3楽章」は鳥肌が立つほど、とても感動しました。至福のひとときを過ごさせて頂き、とても嬉しかったです。心地よい余韻を残しながら家路につきました。

い思いとともに鑑賞し、とても良かったので一週間後再び来館しました。中でもカラーの絵が好きで、少しくすんだ緑がなんともいえず爽やかで、けがれの無い空気を感じさせてくれます。会期中、友の会特別企画のミニ・コンサートが美術博物館のエントランス・ホールにて行われました。私はこれまで2回ミニ・コンサートに参加させていただき、今回で3回目です。名画を大型画面で鑑賞し、ヴァイオリン・大竹広治さん、電子ピアノ・杉浦雅子さんのお二人の生演奏を聴くという趣向でした。好きな絵画と素敵な演奏で時間のたつのも忘れるほどで、中でもタルティーニの「悪魔のトリルより3楽章」は鳥肌が立つほど、とても感動しました。至福のひとときを過ごさせて頂き、とても嬉しかったです。心地よい余韻を残しながら家路につきました。

きっかけは音楽から

神藤 彰子 (806)



今年喜寿を迎えた母が20年程前にこちらの友の会を楽しませて頂いておりました。まさか娘の私が、その頃の母の年齢にはまだ少しあるものの、入会する事になるとは思いもよりませんでした。ではなぜこの春から友の会会員なのかと言いますと、きっかけは昨年上演された市民オペラ「魔笛」のワークショップ

が美博友の会で主催された事。もう一つは何といっても秋に開催された「森の中のブチ・コンサート」を知った事でした。折しも入会早々に「絵画からのインスピレーション」というミニ・コンサートのお知らせがあり、それ

もヨーロッパ絵画と音楽のコラボレーションという夢のような企画。私も以前、絵本の中の挿絵をスライドに映し、それに合わせた曲を演奏するというコンサートに参加した事があるので、今回の宮廷絵画やバルビゾン派の絵画に合わせる選曲をされ、かつ解説付きの演奏もされた大竹氏の楽しいご苦労が多少なりとも推察された様な一時間でした。

エントランス・ホールのガラス天井から覗く宵間の色が少しずつ濃くなっていったのも気付かない程陶醉させて頂いた今回のコンサートは、数年前に行った河口湖畔での、富士山をバックに空の色がいつの間にか変わっていった野外ステージを思い出し、あまりに身近な所で出会えた素敵な一時に幸福感と不思議な気持ちさえ覚えました。次回の企画を心待ちにしております。

友の会 春の研修旅行記 ～見どころ満載、東京探訪～

5月13日[日]～14日[月] 71名参加

青山 勉 (1026)

【旅行1日目】豊橋市美術博物館を朝の6時30分に出発。豊川ICから東名高速に乗り、横浜ICで一般道



武相荘を散策

において、東京郊外の鶴川にある「武相荘」へ到着。エントランスの坂道をのぼると、そこには瓦葺の古民家がありました。それは、戦後

吉田首相の片腕となり、GHQとわたりあった白洲次郎と、その妻・正子が、後年世をすごした住まいです。武蔵と相模の境にあることと、「無愛想」をメタファーとし命名されたとのこと。俗世をさけてのさりげなさ、古く懐かしいものへのこだわりが書斎、囲炉裏端、散策路など随所に見られました。そこには今の日本人の忘れて、形のみならず大和心(精神)をも思い出させる空間がありました。

次に東京都内へ入り、1時間後には日本民藝館へ到着。バスを降り、

しばし歩くと、木造2階建瓦葺の土蔵風の建物が現われました。ここでは民藝運動の創始者とされる柳宗悦の収集



日本民藝館「日本の雑旗展」見学

品を鑑賞。焼き物・染織・漆器・木喰の仏像、さらには濱田庄司やバーナード・リーチ作品など。これらは、木造の建物と調和し、いわゆる美術館とは違い、宗悦の理念とする「健康の美」や「正常の美」がそこはかたく醸し出され、大変なつかしい空間でした。

そして初日最後の見学は「小石川植物園」でした。こ

こは東大の付属施設であり、日本最古の植物園であります。その面積は約16万㎡。都心にこれほどの「森」があるとは、まさに驚きでありました。世界で初めてイチョウの精子発見につながった銀杏の大樹、そして歴史に名高い旧養生所の井戸などを、見て回りました。とにかく広大な敷地ゆえ、ポイント一つ一つを見て回るのも時間の制約があり大変でした。



イチョウ精子発見の碑

【旅行2日目】午前9時にホテルを出発。約1時間後、国立新美術館に到着。今回の旅行で一番楽しみにしていた「モネ」の作品を鑑賞しました。約100点の作品を5つの時代に区分・構成。時代につれ画法が変化して行く様が良くわかり、なかでも「Japonisme」というテーマ群では、彼の日本美術への関心の強さがよくわかりました。とくに晩年の作品「睡蓮」にも様々な作品があり、その色彩・自然の描写・秘められた力強さなどを見るにつけ、身体の奥底までその迫力が伝わってまいりました。

私は、今回初めての参加ですが、美術の知識・素養が乏しい私にとり、大収穫・大満足の研修でした。これをキッカケに豊橋の文化向上のため、友の会の発展のため、微力ではありますが協力していきたいと思っています。有難うございました。



国立新美術館外観

秋の研修旅行「金原宏行館長と観る 静岡の美術館」開催のお知らせ

日時●11月15日[木]日帰り

行先●静岡県立美術館「心の風景 名所絵の世界」展、ねむの木子ども美術館(2007年4月オープン、設計:藤森照信)、資生堂アートハウス「高山辰雄展」

*お申込み方法など詳細は同封のチラシをご覧ください。

収蔵品紹介

[道標・鳩]

柳原 義達 ● YANAGIHARA, Yoshitatsu

1974年(昭和49) ブロンズ
27.5 cm × 52 cm × 41 cm

豊橋市美術博物館のエントランスホールに新たな彫刻作品が設置されたことをご存知でしょうか。豊橋公園の緑を背に、ガラス越しに降り注ぐ外光のなか、一羽のブロンズの鳩が身をすくめるようにして館内を見やっています。

作者は柳原義達。プールデルに傾倒し、本郷新、佐藤忠良、舟越保武らとともに日本の近代具象彫刻を牽引してきた一人です。柳原の主要テーマは頭部像をはじめ、独特の裸婦像を中心とした「人体」などがありますが、道標シリーズに代表される「鴉」や「鳩」もその代表作として知られています。

編集後記

6月中旬のNHK新日曜美術館で、モネを語る西澤潤一先生のお姿を拝見し感銘いたしました。学生時代に雑誌の“みずえ”でモネをお知りになって以来、折あるごとに追い求めてこられた体験を、国立新美術館のモネ展でしみじみと語っておられたのです。ご親類の田中正治郎さんを通じてお願いいたしましたところ、大変お忙しい中、快く父上の故郷に親しみのこもったご寄稿をいただきました。誠にありがとうございました。

豊橋にゆかりの深い野田弘志画伯の展覧会が盛況に開催中、本誌が発刊されます。それとともに豊橋市美術博物館の秋以降の企画のご紹介と今までの友の会の催しをお伝えする事が出来ました。私たちはこれからも皆様のご要望にお応えしようといういろいろ計画中です。ご希望をお寄せください。(神野能生子)

1962年頃より取り組んだ鳩は、当初はキジ鳩をモデルとしていましたが、1970年代の「道標」シリーズより、当時飼育していた孔雀鳩がモチーフとなりました。小さな頭とボリュームある胸部、華麗な尾羽という絶妙なバランスを備えた孔雀鳩は、作者にとって魅力あるモチーフとなったのでしょうか。愛らしい姿ながらも威風堂々とした佇まいは、弾猛でユーモラスな鴉シリーズと好対照をなします。この鳩のヴァリエーションは60種以上に及ぶといわれています。作者のことばによれば「道標」シリーズの鴉や鳩は作者自身の自画像であり、「自然の生きているあかしを造形としてうちたてたい」という思いがそこに込められています。

なかでも本作は第5回中原梯二郎賞を受賞した作品の同型であり、記念碑的な存在といえるでしょう。「道標・鳩」シリーズのなかでも作者の思い入れの強い作品のひとつであり、「読売・現代彫刻10人展」(1974年)をはじめ数多くの展覧会に出品されました。

来館の折にはエントランスホールで一度足を止めていただき、ブロンズの鳩越しに豊橋公園とそこに群れる鳩たちを眺めてみるのも、おもしろいでしょう。

(豊橋市美術博物館学芸員 丸地加奈子)

【表紙作品】

野田 弘志(掌を相む)(部分) ホキコレクション蔵
1998年 油彩・カンヴァス 90.9cm×72.7cm
「野田弘志展 写実の彼方に」より

豊橋市美術博物館 友の会だより「風伯」第65号

編集・発行 豊橋市美術博物館友の会
会長 藤 文成
担当副会長 宮田 正人
編集長 鈴木 伊能勢
編集委員 神野能生子 奥野富美子 福島陽子
協力 豊橋市美術博物館
〒440-0801 豊橋市今橋町3-1 TEL.0532-51-2882
平成19年8月20日発行(5月・8月・11月・2月各20日発行)
平成10年3月17日 第3種郵便物認可 定価200円
※会員は会費に含まれます。※定価には消費税が含まれます。